

映画の中の介護・ケア・高齢者：ただそばにすること

映画（病気や介護を直接のテーマにしたもの以外で）の中の場面やセリフで、介護の仕事に引き寄せて観たものをいくつか紹介する。また、後半では映画に描かれたあるケア行為について考えたい。

<介護、ケア、高齢者が出てくる場面、セリフから>

1. イコライザー 2 (2018)

タクシードライバーをしながら街で悪人を見つけて懲らしめる元特殊工作員が主人公。タクシーの常連利用客で老人ホームの入居者が、戦争で長らく離れ離れになった自分の姉を探していた。老人はその所在を捜索するように、手掛かりとともに施設や当局に働きかけるのだがなかなか聞き入れてもらえなかった。しかし主人公の働きで会うことができた。その時老人ホームの管理者が老人に謝って言う。

「施設の入居者が言うことは往々にして大袈裟なので、無視してしまいがちなのです。」

When a resident says things, that are grandiose by nature, we tend to dismiss it.

認知症を持つ人が言う言葉を僕たちは初めから話半分に聴く癖があったりする。でもその中にその人が必死に訴えていること、心の底から言葉にして表現していることがきつとある。それを聞き逃さないようにしたい。

2. 男はつらいよ 僕の伯父さん (1989)

寅さんが甥の光男の恋路に付き合う話。光男は東京から彼女のいる佐賀までバイクで会いに行く。偶然同宿した寅さんと彼女が住んでいる家を訪ねる。寅さんはその家のお爺さんから佐賀にちなんだ歴史や文学、美術などの話を延々と聴かされる。嫌がらずにそれを聞く寅さんはその娘から感謝される。寅さんは言う。

「お年寄りをお慰めするには、なんと言っても話を聞いてやることが一番ですから」

寅さん、さすがです。

3. ベイビードライバー (2017)

主人公ベイビーは優れた運転技術で犯罪者を逃亡させる仕事をしていたが、彼らに命を狙われることになる。ベイビーは若い頃両親を交通事故で亡くしていた。自分の育ての親であり今はその世話をしている聾啞のアフリカ系男性の安全のため、彼を老人ホームの玄関の前に連れてゆき、十分なお金とともに録音でメモを残す。

「私はテレビが好きで、時々古いレコードを振動で聴きます。それから（中略）ピーナッツバターが好
きです。パンのへりまで塗ってください。私の世話をよろしく。」

I like TV, sometimes listen to old records through vibrations and like … peanut butter,
spread to the edges. Please look after me.

僕らもご利用者の趣味、生活上の習慣などをできるだけ継続してさしあげたい。バターの塗りかたに至るまで。

4. 素晴らしきかな人生 (2016)

主人公は会社を経営するが、幼い子供を亡くした痛手から立ち直れず、仕事に手がつかなかった。困った同僚たちは対策を相談するのだが、その中の一人が自分の母親の話をする。母親が脳卒中を患ってから妄想や訳のわからない話をして、そのことに苛立っていたのだが、ある人からこうアドバイスを受けたと言う。

「自分のリアリティを相手に押し付けず、彼女のリアリティに自分が入っていくといい」

Maybe you should stop trying force your reality on her, just go into her reality.

そのアドバイスを実践して、母親の妄想の世界に入り込み、その話にうまく合わせて会話する様子が描かれていた。彼らはこれをヒントに主人公を立ち直らせる方策を思いつく。

認知症を持つ人へのケアの技術として、いろいろなところで言われている。例えば、

“認知症の人の世界を理解し、認知症の人がどんな環境のもとで何を考えているか、気持ちはどうかを常に頭に描きながら、俳優になったつもりで相手に合わせる演技をすることが大切です。” 「認知症の人の心がわかる本」 杉山孝博 2020

5. シャイン (1996)

主人公は子供の頃から父親からピアノを厳しく教育され天才と呼ばれたが、音楽学校の卒業演奏で難曲を弾き終えると同時に昏倒してしまう。それから統合失調症を病み精神病院で治療を受ける。その間、長くピアノを弾くことはなかったが、ある時近くのバーでピアノを弾いた。その演奏が賞賛され、それをきっかけにピアニストとして復帰する。実在のピアニストがモデル。

ご利用者に安来節の大師範をされた方がおられた。もう演奏したり歌われることはなかったが、安来節をCDで聴いていただくといつも指で調子をとられた。お願いすると往時を伺わせる声で歌われた。歌い終わると言われた。

「こんなもんです」「昔は歌っていたですよ」

ご夫婦でご利用だったので、奥さんは隣でにこにこして聴いておられた。ご利用者が輝いていた時のことを知り共有したい。

6. The Guilty (2018)

警察の緊急電話通報の対応をするアズガー。ある女性から拉致されたと助けを求める電話を受ける。アズガーと女性、警察署員や関係者との緊迫した電話のやりとりが描かれる。電話口で女性が興奮して泣きじゃくり、話ができなくなってしまった時、アズガーがふと「君の好きな食べ物は何？」と尋ねる。すると女性はその質問に答えた。続けて「休みの日は何をしています？」と尋ねる。そうしたやりとりの中で女性はだんだん落ち着いてきて、事件の状況の説明ができるようになった。

認知症を持つ人が思い込みや興奮から周りの言葉が全く受け入れられなくなることがある。そんな時、映画のような「場面転換」が有効なことがある。対象者がとらわれていることと関係のない、でもその人が無関心でもない話題をタイミングよく提示する。それに注意がうつり怒りや興奮が収まってくる。

” 認知症の人には、一つのことにこだわり続け説得されたり否定されたりすることはこだわりを強めるだけ。そんな時の対応のコツは「場面転換をする」” 「知っていますか認知症」 杉山孝博 2012

7. Dear フランキー (2004)

リジーは夫の暴力から逃がれるため何年もの間、ろうの障がいを持つ息子のフランキーを連れて各地を転々としながら暮らしてきた。フランキーは父親の顔も覚えていなかった。リジーは息子に、父親は遠洋航海に出かけていると嘘を言い、世界を航海する父親から送られてきたと思わせて、自分で手紙を書いて送っていた。フランキーは手紙が届くと喜び返事を書いたが、それも実は彼女が私書箱で受け取り読んでいたのだった。そのうち「父親」とフランキーが会わなければならない事態になる。困ったリジーはある男性に頼んで、フランキーに父親として会わせることにした。

母親は悩みながら息子のために優しい嘘をついていた。実は、フランキーはある時から手紙が実の父親からでないことがわかっていたが（父親という男のことも）、母親のためにその虚構を受け入れていた。母と子のそれぞれの優しい嘘。

仕事の中で利用者に対して悪いと思いながら言ってしまう、嘘や虚構のことを思った。

8. トゥモロー・ワールド (2006)

赤ん坊がいなくなった未来の世界が描かれる。国家は崩壊し暴力が蔓延していた。その中で主人公の男は、奇跡的に赤ちゃんを出産した女性とその赤ちゃんを暴徒から守り安全な場所に連れて行くことになる。敵に囲まれ激しく銃撃されて、もうだめかと思われた時、赤ちゃんが激しく泣き出した。20年近く

赤ちゃんのいなかった世界に響いた鳴き声に周囲の人々は驚き手を差し伸べ、兵士たちも銃撃をやめて赤ちゃんたちが目の前を歩いてゆくのをただ見ているのだった。とても感動的な場面。

ご利用者のところに保育園の幼い子どもや赤ちゃんが来てくれることがある。するとどんな方でも笑顔になり赤ちゃんに手をさしのべる。

これには例外がない。認知症があっても、誰もが脳の奥底に残っている深くてやさしい感情。

9. エール (2014)

主人公ポーラにはろうあ者の両親と弟がいて、家では手話で健聴者との橋渡しをする役目をしていて、学校で歌の才能を認められ、家を離れて遠くの学校へ進学を勧められる。ポーラは家族への献身か歌の勉強かの選択に悩む。ある時、父はポーラに歌をうたってくれと言い、指をポーラののどに当て歌を聴いた。

前出の<Dear フランキー>では、母親が友人と楽しそうに歌う様子を隣の部屋から見たフランキーが、隔てているガラスに指をあてて母親の歌を聴くシーンがあった。同じく<ベイベー・ドライバー>ではろうあ者がレコードを振動で聴いていた。

耳や目、なんらか身体に障がいがある人は、それを補う方法をその人なりに持っているだろう。認知機能の障害が衰えてもそれを補う、または一層敏感になる情動がある。それを丁寧に見つけ支援したい。

10. ザ・ライダー (2017)

ロデオのライダーだったブレイディーは落馬して頭部に重傷を負う。ロデオはもうできないと医師から言われるが、治療中に病院を抜け出し、再び馬にのろうとする。彼が先輩として慕っていたレインもまたロデオ（こちらは牛）で怪我をして、話すことも歩くこともできなくなっていた。ブレイディーはレインがリハビリを受けている病院を訪ねる。レインは馬の背中を模した器具に跨りロープを握ってリハビリをしていた。

その時のリハスタッフの着るシャツの背中に“QLI”というロゴマークが見えた。前には“Unrivaled”（無敵の）とある。QLIはアメリカの実在のリハビリ施設で、そのホームページによると、リハビリに患者の実際の生活や職業、スポーツの用具や場面を取り入れている（“Real-world setting”）。だからレインはロデオマシンを使っていた。ただのウェイトトレーニング、一般的な作業訓練よりも動機付けや回復効果を高めるのに有効だろう。

僕らのご利用者ではどうだろうと思った。

くただそばにいる、ということ：二つの映画のシーンから

11. ラースと、その彼女 (2007)

幼い頃に母親が亡くなった体験から人との交流を避けているラース。心配する家族からガールフレンドはいないの？と何回も言われ、ある時ラースは等身大の女性の人形（ラブドール）を連れてきた。ラースは本当の人間のガールフレンドとして家族や街の人に紹介する。みんなは最初驚き戸惑うが、やがてそれを受け入れてゆく。そのうち彼女が重い病気になる（とほんとうにラースは思った）。深く悲しむラースの自宅に近所の女性が集まり食事を作ってあげてから、椅子に座って編み物を始める。ひとりがラースに言う。

「辛いことがあった時は、みんながやってきて側に座るの」

They come over and sit. That's what people do when tragedy strikes.

12. ドライヴ (2011)

主人公キッドは犯罪者を車で逃す仕事をしている。表向きの仕事である車の修理がきっかけで、ある母子と知り合う。その子の父親が刑務所から出所してくるが、昔の犯罪仲間からひどく殴られ大怪我をする。少年はその様子を目の前で見てしまいショックを受ける。それを知ったキッドは彼の部屋を訪ね、となりに座ってテレビをいっしょに見る。

これらふたつのシーンでは、気にかけている人がひどく辛い状況にいることを知り、その人のもとを訪ねる様子が描かれる。

その様子を記述すると — 彼（彼女ら）は対象者に特に話しかけるわけではない。そばで編み物をし、またはテレビを観ながら、ただ一緒に時間を過ごす。対象者に無関心であるかのようにさえ見えるが、そ

の人を心配していることは対象者をチラチラ見ることからわかる。が、視線は合わない。両者は対面せず、その間に少しの距離が保たれている。言わば「ただそばにいる」だけと言える。

この行為はある「弱さ」の中にいる人のことを気かけ心配して関わるという意味でケア行為のひとつと言えるだろう。そして映画の中だけのことでなく、私たちも同様のことを誰かにしたことがあり、また、されたことがある。だからこのシーンに共感するのだろう。これは私たちの介護やケアの中に見られるだろうか。そうだとしたらどのように行われるだろうか。

参考になりそうな文献を探してた。

“看取るあなたにできるのは大切な人にただ寄り添うだけ。” 「ただ、寄り添う。」 玉置妙憂 2020

“（患者のために学ぶべきは）いかに沈黙し、いかに話を聴き、そしていかに唯、そこに居るかです”
「シシリー・ソンドースとホスピスの心」 小森康永 2020 よりソンドースの言葉

“「一緒にいる」と言うのは、その人の気持ちに寄り添うということ・・・お互いの深い信頼関係をもとに一つの時間を共有しているということです” 「たましいのケア：病む人のかたわらに」 藤井理恵ほか 2009

“（精神科デイケアを飛び出した患者を迎えに行き）「戻れますか？」「もうちょっと、ここにいたい感じかも」・・・そして僕はシーソーに座る。ジュンコさんはブランコに座る。何か話をするのが必要なのではない。脅かされずに一緒にいることが大切だ、と思う。” 「居るのはつらいよ：ケアとセラピーについての覚書」 東畑開人 2019

“ケアとはその相手に＜時間をあげる＞こと・・・時間を共に過ごすこと自体がケアである・・・他者のプレゼンス（じっとその場にいてくれること）がいかに重い意味を持つか” 「聴くことの力：臨床哲学試論」 鷺田清一 1999

“看護では傾聴から Presence ＜そばにいること、寄り添うこと＞へと発展させる・・・心を向けて傾聴するとともに、思いや心をその人のそばに置く” 近田敬子 鳥取看護大学通信 2019

“「ただ居る」というのが、さまざまな技術を削ぎ落とした後になおも残るケアの核心なのかもしれない。” 「ケアとは何か：看護・福祉で大事なこと」 村上靖彦 2021

ふたつの映画の“近所の女性”や“キッド”の気持ちを想像しながら、「ただそばにいる」人の態度や心持ちを記述してみる。

- ・対象者のことを心から気かけ、心配している。
- ・その人の心情を知ろうと（＝共感に）努めるが、完全には理解できないことを弁えている。
- ・傷つき毀れそうなその人に、安易に言葉をかけたり、触れたりできない。できるのは、そばにいてあげる（＝その人に私の時間をあげる）ことだけ。
- ・あなたを心配している人がいること、あなたが一人でないこと、をわかってくれるといいが・・・、と思っている。
- ・今いる自分たちのことを重荷に思わないで。（編み物したりテレビ見たりして）好きに過ごしているのだから。
- ・対象者が今そのような状態でしかいられないことを、そのままに認め受け入れて（受容して）いる。
- ・対象者が更に深刻な状態にならないよう（特に健康や安全の面で）見守っている。（女性たちはラースに食事を作り、食べなさい、と言った）
- ・その人がいつか声を発することを「待つて」いる。言葉がもれ出たら、受け止め（＝傾聴し）たいと思っている。
- ・その人がやがて「自分の力で」回復に向かい始めることを希っている、または祈っている。

・解決策や答えの出ない難しい状況をその人と一緒に「耐え」(*)ながら、立ち去ることなく、そばに居る。
*「ネガティブ・ケイパビリティ: 答えの出ない事態に耐える力」 篠木蓬生 2017

このような「ただそばにいる」人の支援態度・姿勢を要約すれば、「弱さの中にいる人のことを親身になって心配し、心の声に耳を傾け、共感と受容に努めながら、その人の力を信じて、謙虚に忍耐強く待つ態度」ということができるでしょうか。

上の文献(玉置、ソンドース、藤井)にもあるとおり、「ただそばにいる」は看取りのケアにおいてしばしば注目される。ではそれ以外に「ただそばにいる」ことは見られないのだろうか。「ラースと、その彼女」では大切な人の「看取りをする人」をケアする人が描かれます。「ドライブ」でもまた父親のことでショックを受けた少年を気遣う人が描かれます。病の床に臥した人を看取る人ばかりでなく、どうしようもない「辛さ」と「弱さ」の中にいる人に寄りそう僕ら支援者もまた「ただそばにいる」ことしかできないことがあるだろう。そのような時、支援者は性急に解決策を講じたり、またはその場の重苦しさに耐えられずに逃げだしたくなることもあるかもしれない。でもそうせずに、「ただそばにいる」ことを選ぶと言う支援の方法があることをふたつの映画のシーンが示してくれていると思う。

文献には精神障がい事例(東畑)があったが、高齢者ケアまたは認知症ケアの現場でも起こり得る。対象者はいつもうなだれていると限らない。「辛さ」「弱さ」故に妄想や興奮に囚われていることもある。それでも支援者はその状況に「耐え」ながら、「ただそばにいて」見守り、回復を待たなければならないことがある。自分の体調の不甲斐なさに涙する人を、そっと見守り「ただそばにいる」ことしかできない時がある。振り返って、その人の心に寄り添って「ただそばにいる」ことができただろうかとも思う。

映画「ラース」はラースの精神の回復または治癒に向かう物語でもある。精神的な弱さを持っていたラースが人形の彼女を周りの人に紹介し、その人形の死(ラース自身の内面の変化)を経て、最後は本当の人間の彼女ができることを暗示して映画は終わります。その過程のある一場面で「ただそばにいる」というケアが行われたのですが、ラースの周りの家族や町の人々は、その場面だけでなく、ラースが人形を紹介した時からずっと、言わば支援者として上述の「ただそばにいる」の支援態度と姿勢でいたと見ることができます。その中でこそラースは回復に向かうことができた。

暖らん委員会(令和3年12月23日) 所内研修 担当: 山崎